

31) 手術前手指消毒法についての検討

三科 武・斉藤 博 (鶴岡市立荘内病院)
金田 聡・鈴木 伸男 (外科)
西山千恵子・長谷川敬子 (同 手術部)
田宮 洋一 (新潟大学手術部)

手術前手指消毒法として、もみ洗い法が目されてきており、ブラッシングによる皮膚炎の発生を少なくできるといわれている。今回もみ洗い法による手指消毒の効果について検討した。

方法：手指消毒方法別に次の様に4群に分けた。

- (1) ヒビスクラブ3分×2回ブラッシング
(2) ヒビスクラブ+ウェルバもみ洗い
(3) イソジン5分×2回ブラッシング
(4) イソジン+ウェルバもみ洗い

各群15例とした。それぞれ消毒後グローブジュース法により検体を採取し、48時間培養後菌数を測定した。

結果：細菌数0はそれぞれの群(n=15)で10例, 12例, 4例, 9例となり、(2)群と(3)群間に有意差を認めた。

まとめ：もみ洗い法は手術前手指消毒法として、これまで行われてきたブラッシング法に比べ消毒効果に差はみられず、皮膚炎予防に効果が期待できる。

管理、オピオイドの使用法、告知問題、精神的支援などについて若干の知見を得たので報告する。

患者は51歳女性で、口内潰瘍による摂食困難を主訴に昭和61年5月9日紹介来院した。右側下顎肉肉癌(T2NO-MO)、左側舌癌(T2NOMO)の多中心性癌の診断のもと化学療法、放射線療法、外科療法にて治療を行ったが、その後も口腔内に異時性多発癌の発症や再発を認め、平成8年6月より腫瘍制御不能となり Palliative Care へ移行した。疼痛管理は早期在宅管理を目標に MS コンチン錠を坐剤として用いたが、腸管からの吸収が一定せず、塩酸モルヒネの経管投与に変更した。

本症例では、度重なる手術後の機能障害や変形による栄養・薬剤投与経路の規制や精神的苦痛、不安や葛藤、長期経過中に変遷した告知など多くの問題を含んでいた。

2) 口腔領域 Verrucous carcinoma の6例：第2報

—PCNA, Ki-67 抗原の免疫組織化学的検討—

宮浦 靖司・星名 秀行
鶴巻 浩・長島 克弘
宮本 猛・相馬 陽 (新潟大学歯学部)
高木 律男・大橋 靖 (口腔外科)
鈴木 誠 (新潟大学歯学部附)
(属病院臨床検査室)
深澤 肇 (由利組合総合病院)
(歯科口腔外科)

口腔領域の Verrucous carcinoma は、1948年に Ackerman により初めて報告され、臨床的にも病理組織学的にも特徴のある像を示し、1971年の WHO の分類では扁平上皮癌の一亜型として位置づけられた。今回は私達が経験した6例(舌4, 下唇1, 歯肉1)を対象に、上皮の増殖能について、増殖細胞関連抗原である PCNA と Ki-67 抗原の免疫組織化学的染色を行い検討したので報告した。

結果：PCNA および Ki-67 抗原の陽性細胞は全症例で認められ、上皮の基底層や傍基底層に主に分布しており、腫瘍部分では周囲の正常粘膜部よりも明らかに陽性細胞が多かった。陽性率は PCNA が平均 52.5% (48.3%~59.7%)、Ki-67 抗原が平均 39.7% (34.6%~43.7%) で、PCNA 陽性率のほうが高くなる傾向があった。また対照として用いた正常口腔粘膜5例の陽性率は、PCNA が平均 35.2%、Ki-67 抗原が平均 25.2%で、いずれも Verrucous carcinoma のほうが有意に高値であった。

第55回新潟癌治療研究会

日時 平成9年7月12日(土)
午後1時30分~6時
会場 新潟東映ホテル
1F 白鳥の間

I. 一般演題

1) 疼痛管理に苦慮した口腔多発癌末期患者の1例

廣安 一彦・山口 晃
中村 直樹・小西 雅也
上滝 俊彦・山崎 毅彦
古屋 慎一・水谷 太尊
二宮 信彦・皆沢 肇
阿部 幸作・村山 剛
伊藤 秀俊・桑原 徹子 (日本歯科大学)
徐 完植・長沢 貴子 (新潟歯学部)
武田 健志・土川 幸三 (口腔外科学教室)

今回われわれは、11年間に21回の入院を繰り返した口腔多発癌患者の Palliative Care を経験し、その疼痛